

富岡

紅露賢五郎

長尾圓次郎

日和佐

多田 一男

長尾 一太

座席札の逆立ち

な を た 生

市會議場などで議員の座席を標示する三角錐形の坐席番號札を見かける。あれが三角形の底面の上に立つてるから誠に坐りよい、けれどもあれを逆にして三角形の頂點で立てゝ見ると言はれても中々立てられるものではあるまい。

世間でよく見かける何々會、何々俱樂部といふものになのがざらにある。先づ會長には知名の士をもつて來る次に副會長、理事、委員、幹事長、幹事と役名を列べる丈けでも大變だが中堅處はお役所の課長級が占領する、そのおえら型には昔の金ピカ連中が列んで盛觀を呈するのだが、擬會の運用を司る——實際に仕事をすると出來

得る限り少數の人を充てがつて「君！あれもやつて呉れ給へ、これもやつて呉れ給へ」とやる。實務に當る連中は「へト／＼に追ひ廻され、こき遣はれるのにおえら處は徒に盲判の敷を列べて我能事了れりと泰然としてゐる。

こんなのが坐席札の逆立ちでなくて何だ、かゝる頭でつかち尻すぼみの状態で會務の運用宜敷を得、年と共に隆昌に向ふなど、期待する方が無理で、一寸ゆすぶればすぐたつく。

お役所にしてからがさうだ、上役たるものは常に下僚の立場を考へて、そうでもない事をむやみに下僚におしつけ

ないやうにし、下僚の仕事が爲し易いやうに仕向けるのでなかつたら、そのお役所の能率は揚るまいではないか。

道路改良會なども座席札の逆立ちに陥つてはおらぬか。

嬉しい時の負擔

工學博士田邊朝郎先生は私が直接御指導を受けた事があり、且つ最私淑してゐる先生の中の御一人である。

先生は昨年喜壽を迎えられたから今年は七十八の高齡であるが矍鑠として壯者を凌ぐの健康を保持せられ、京都帝大の名譽教授として功成り名遂げられた方であり乍ら常に諸般の研究を續けられておるその精力的なる御努力に對しては眞に頭の下るのを覺えるのであるが私が此の程大阪の電氣俱樂部で先生に御目にかゝつた時、先生に卒直に

「先生のやうに健康を保持されるのは何か別段の御工夫がありますか」

と伺つた處先生は

「私は別に運動をやる譯でもないし只私には本でも讀むで

おれば無上の樂みなのです。しかし嬉しい時の負擔は本人の氣がつかぬ間にいつか重い負擔となることがあるもので私はそれを常に警戒してゐる」

と答へられた事であつた。私は是ある哉と思つた、なる程時には勝に乗じ、或は興に乗じて無我無中でやつてる時には負擔になつてるとは思いもよらずに隨分無理な事や不攝生な事をやつてる場合が多い。舊友と相會して夜を徹して酒に浸るなんて事を今でもやりかねない私などはお耻しくて先生をまともに仰ぐことすら出来ないが、こんな時に不知〴〵に嬉しい時の負擔がかゝつて來てゐたのだなど冷汗三斗の思をすることである。

本末顛倒

關東大震災の復興事業を境として我邦道路橋梁の技術界は格段の進歩を遂げ、復興事業の前と後とに出來た橋梁を見ればすぐ判別がつく程で、隔世の感があるといふ言葉は

な時にあてはまると思はれる位なのだが、私は一つ感心しない事がある、それは橋梁の照明燈の設備だ。

私は照明學會のメンバーでもなければ照明については何程の智識も無いものだが近頃の橋面は誠に暗いのが多い。氣をつけて見ると親柱を始めとして中間の電燈柱などにしてそのランプのカバーのデザインがとても重厚で晝間明るい處で打見た時の感じは或は奇抜でよいかもしれないが甚しいのはあれに點燈したら幾干の光がもれるかと疑はれる作品すら随分多い。その爲めに橋面が暗いのだといふ事が判つたのだが本末顛倒も甚しいではないか。

照明燈、ことに親柱の照明燈の設計をする人が形容の奇抜な事や晝間見た感じに重きを置く關係から夜の照明の遮蔽となるやうな重厚なカバーをランプに着せるのだ、實に思はざるも甚しい、特に復興事業以來此の傾向が顯著なことは否めないと思ふ。

本末顛倒をやつておる事例は世の中に随分あるが、こんなのは技術者にとつては、耻辱ではあるまいか、此の種の

橋梁を見る度に橋梁本體が如何に立派な設計であつても私は落第點をつける。

橋梁は晝間計り人の通るものではないのだから一日中の半分の利用のある夜間の照明を餘りにも等閑に附せざる事を橋梁と設計者と意匠家とに囑望して止まない。

上に強い人、下に強い人

役人たると會社員たるとを問はず、教員たると職人たるとに論無く、あらゆる社會人は凡そ「上に強い人」と「下に強い人」との二層に分類される。この分類が殊に顯著なのが役人であるやうに私は思ふ。

上役と下役との關係に於て上に強い人ほど下には弱い、下役にやさしいのである、下に強い人ほど上には弱い、上役にペコ／＼するのである。

世の中に例外の無い規則は無いそうだが是れ斗りは私はその例外を見た事が無い。

私は世の中に立活くやうになつてから間もなく此の二階

級の存在に氣がついて不思議なことがあるものだと考へた、それが近頃では此の二階級の分類に分れることが當り前なのだと思ふ様になつて來た、何の不思議もある譯ではないさ。

考へても見給へ、「上に強い人」は下役であり乍らドン／＼意見を立て、上役にブツカツテ行く、上役の言ふことに直には従は無い、時々上役をへこまして凱歌を擧げる、理の當然な場合なのだからツマリ當りまへの事が當りまへに行はれたに過ぎない。こういう級の人は上役は必しも萬能では無い、よく下役に聽從して物事を判斷す可きだと考へる、だから下役に向つてはやさしい上役となる、思ひ遣りがある、後、來、大、を、爲、す、べき、素質、を、有、する、人物、が、多、い。

「下に強い人」は上役であることの意識が強く、よく下役を頭ごなしに叱りつける、苛酷な命令をする、随分平氣で私用に下役をこき使ふ、少しでも下役が意見をのべたり反抗がましい態度に出ることを極端にきらふ、オレは下役よりも、エライのだぞとの意識でいつばいなのだ。こんな手

合に限つてその上役に對しては常に是れ命是れ従ふでドンナ事にぶつかつても多くは何の意見も出ない、従順そのものでペコ／＼頭を下げておる斗りか臺所口へまはつて奥さんの御機嫌まで取むすばふとする。それもその筈上役はエライ人だと思ひ込むでおる。ダカラ上役は威張るのがあたり前で、下役はペコ／＼すべきものと思ひ込んでおるのだ、のみならず、上役の御機嫌を取り結ばなければ生きては行けぬ位に信仰してゐるのだからその目的の爲には手段を選ばない、つい、お臺所に入入りするやうになる。こんな連中は多くは獅子身中の蟲で、どうかすると上役の籠に馴れて、それが嵩じて悪い事をするやうになる、最も唾棄すべき品物で將來性などは藥にしろくも見出せない手合なのだ。

世の中は妙なもので、どうかすると獅子身中の蟲の方がのさばる、上役が威張つておれる方が心地よいものだから、この蟲を愛するやうになるのだ。

吾等は斷じて、蟲にはなり度く無い。